

## 翻刻・解説 宗養連歌百韻撰

齋藤義光

本紀要第二十号で「連歌師宗牧・宗養作品年譜稿」により両連歌師研究の基礎的作業を終えたので、この号では百韻の具体的作品の一部を提示したい。宗牧・宗養父子が連歌俳諧史の流れの上で、新しい視点から論ぜられる必要のあることは既に数度に亘って述べたが、特に宗養については、父子相伝の故を以って、父宗牧の偉大さの陰で、必ずしも従来正当に評価されていなかったように思われる。前掲論文でも既に論じたように、例えば鳥丸光広の「耳底記」では宗養の作風について、「宗養連歌、いかにもこまかにありしなり。…宗養ほど、連歌をくり返し案じたる人はなかりし云々」と述べ、「歌道聞書」では「連歌の上品を論ずる時は、宗養迄にて、其後断絶也」と絶賛している。

宗養は、初見の、十六歳の天文一〇年の「夢想百韻」から、三十八歳で没するまで、その作家活動は決して長い年月ではなかったが、その連歌壇でのリーダーとしての活躍は父宗牧を凌ぐものがあった。同座した回数、百韻では年次の明らかなもの七十五、年次の不明なもの八、計八十三巻、千句では年次の明らかなもの十一、不明なもの一である。永禄九年の薬師寺本の百韻は死没後なので計に加えない。当然のことながら年次を追うに従って一座した巻数が多く、百韻だけでも永禄は六年間で二十七巻に及んでいる。この間、連歌作者としてかわりをもった人々は極めて多く、公卿・上級武将・有力連歌師と広

範囲に及んでおり、宗養の連歌研究の上でこれらの人々とのかわりは当然配慮に入れなければならない。有力な公卿の協力者としての大覚寺義俊（一字名・金）、三条西公条（蒼）、父宗牧以来のライバルであり、又協力者の寿慶・昌休・紹巴、当時の文壇の活動で欠くことのできない上級武将で畿内に覇をとらえた三好長慶・冬康一族、更には越前の雄、朝倉吉仍等までを考慮し、次の十巻の百韻を撰定し翻刻することにした。

注\* 「大妻国文」第18号・19号

\* 大妻女子大学文学部紀要第二十号

底本 大阪天満本（れ・5―29）

校本 小鳥居家本

発句サン夢想宗養独吟 夢想之連歌

ちりてなを花にまされる庭の雪

風こそいろとなひく青柳

明わたる霞のたえま水はれて

月ほのかなる川上のやま

いつちとか秋もしくれて過ぬらん

ゆふへのそらそやゝ寒くなる

御 題

蘆火のミ里とふかたの夜よすかにて  
わくれは深し竹の下みちミチ  
風や猶霜ふきむすすさふ音ならし  
まくらにちかきあかつきのかね  
きぬくは物かはとのミまちわひて  
かた見ともせむ一筆の跡  
かれて行春の山眉かすむ日に  
かゝみのかけものとかなる水  
玉嶋や川風にははふ梅さきて  
たか袖ならしすきかてにミゆ  
遠近の道はそこもしら雪ニ  
おりたくほとをたのむ柴の戸  
寂しさはたゝ侘人のものなれや  
こゝろをとめは明かたの月  
消のこる嶺のよこ雲雁鳴て  
あきのあらしやとたえ行らん  
川音はもみちの底にむすほゝれ  
いり日の杉間橋遠きかけ  
人氣さへまれの古寺門さして  
浮世のつてや外トヤになすらん  
鳴すてゝ死出の山路の郭公  
さらに涙のあめと降ころ  
障ある我なから詠めして  
雲隔な隔かくしおもひやるかた  
花さけは木間にうとき春の月  
松にかゝれる藤の黄昏明  
鶯のねぬ声しるく打はふふき

また朝床のさよ深きころ  
霜いく重旅たつ袖に払ふらん  
あと吹をくる野辺のあきかせ  
小房竿鹿のなきているさの山遠み  
あけにけらしな迷ふうす霧  
かけ清く月も流る川なミみに  
誰御祓せしあさのゆふして四手  
神もやハいのる心を受さらむ  
つれなきともたのミてもミよ  
いのちたにあらは逢せもなからめや  
君かめくみを松の戸の山  
陰ふかき谷のおくにも春はきて  
つらゝいし間のかつとくる音  
露かすむ苔地の流う移つる日に  
むらゝのこるけさのはつ雪  
吹たゆむ風もしハしはさえくゝて  
寝さめの空や更んとすらむ  
虫のねもきゝわたる夜の在明に  
あはれなそへそ古里の秋  
さらてたに涙の袖に露をきて  
ゆふへといへはものそかなしき  
いりあひのかねてもしるき偽に  
こりすも人を何たのむらむ  
とふことに折ては過ぬ花の陰  
岩ふみならずミねのさわらひ  
山賤の雪のしたミち隙見えて  
垣根つたひの水ミとりなり  
もり出る寛のしつুকたえゝくに

冬田のはらは行人もなし  
 うちけふる遠の一邑くれ初て  
 松の葉かくれ雨や晴けん  
 山のはの涼しさそふるよハの月  
 うたゝねしまの袖の秋風  
 うつひとの心はさそなから衣  
 あらそふほとも露の乱暮  
 永しともおもほえなくの春の日に  
 糸も古枝の柳さひしも  
 もえいつるみきはの小草色見えて  
浅瀬のあさくハ水の霜のむらきえ  
 住吉のさとハ往来の滋かれや  
 わするゝくさはいかにつまゝし  
 ひろひをく其言のはもいたつらに  
 玉とこたえし涙はかなや  
 まほろしに行逢つてを聞もうし  
 見ぬ世も恋のためしとハなる  
 生田川うきねの鳥の静にて  
 夕日をひたす水はるか也  
 をく網のつなて引はへゆく舟に  
 かすみたなひく末もわかれす  
 出る野の春の旅臥夜をこめて  
 しきすてかたき若草の露  
 すミれこそあさる雉子の妻ならめ  
 あれはてにたるいにしへのあと  
 哀たゝ名のミのこれる都にて  
 秋もなかはゝ月の在明  
 憂身今きえまつ虫にかハラめや

おもひもをかむ露も忘るな  
 かへらんもおく山住ハしらぬ世ニ  
 有にまかせむ心なりけり  
 こまとめよいつくもおなし花盛  
 なみさへ色に并ての山吹  
 水かさます春の川岸雨すきて  
かすかわたす人なき舟 幽なり  
 野辺やなお夕景寒く成ぬらん  
霜しもかとさやく竹のはの月  
 軒ちかき秋の山かせをとつれて  
音信をのかいろくさはくむら鳥  
 此百韻をうつし侍るに  
 何やらん兼載の翁の  
 おもかけも浮ひ侍りて  
 なつかしきものなるへし  
 長松云

ナシ

永閑 宗養 寿慶 昌休 清誉  
 宗養自筆懐帋



たけ行年そ身に覚えぬる  
 古へもしらすハいとふ友ならん  
 寂しきやまの松風の聲  
 見はやすを待あへぬまの花散て  
 残り多くも春はいぬめり  
 水鳥のうき波かすむ天津雁  
 遠きや舟にゝほの海つら  
 五月雨のあまのかるもにかつ晴て  
 ほさむほさしも我からの袖  
 心より入ての恋路いかゝせむ  
 閑もる中もゆるし初すや  
 七夕のあふ夜もさらに儚くて  
 月もしれとそ恨せらるゝ  
 塩竈の跡なつかしき秋風に  
 よせてはなみの松にこたふる  
 岩にハふ藤咲春や帰るらん  
 たれ日長さをやま寺の暮  
 鐘もハたかすめる法の聲をへて  
 こゝろやよるを待てすミけむ  
 ねさめこそおもひとる身のよすかなれ  
 ゆきもはなれは千里はかりか  
 かゝみにもひかふる今朝の馬の上  
 まれのつてこそ筆もつきせめ  
 あらさらん我世としるもつらかれや  
 子はおやならて誰かいさめむ  
 そむくをも仏の道のあはれひに  
 ちりにましハる神垣の内  
 散はつる葛葉に風の音さひて  
 しのたの森のあきの暮かた

閑 狼 休 慶 狼 休 派 祐 慶 閑 派 狼 休 慶 養 閑 祐 頼 休 派 閑 狼 慶 休 祐 派 頼 慶 閑

ほとくど月もよこ野の在明ニ  
 浪のたえまの霧の遠しま  
 行衛もやまほによるへの船ならん  
 うきぬなか居に年も移りぬ  
 たれとしもたえたる聲ハきゝわかつて  
 うちかたらふもあやしかりけり  
 袖ちかみ木伝ふ花の百千鳥  
 ふかき園生にもに森かゝそする  
 春は猶はつ雪よりも珍らしく  
 なかめはすてし霞む山々  
 永閑十六 了派十四  
 宗養十五 能祐十二  
 寿慶十六 氏頼 八  
 清誉 一 能哲 二  
 昌休十六

ナシ

底本 内閣文庫本  
 天文十八己酉年三月廿四日  
 於 大覚寺殿 四吟  
 何人  
 咲藤の花のしなひも春日哉  
 庭ハさくらに風の青柳  
 鶯のわか明ほのと鳴出て  
 行衛残らぬ月の山陰  
 水の面ハ打ミ渡しの薄霧に  
 波のまかひの秋の川舟  
 飛蛭たか一村の暮ならん

派 頼 休 派 祐 頼 休 派 閑 狼 慶 休 祐 派 頼 慶 閑 派 狼 休 慶 養 閑 祐 頼 休 派 閑 狼 慶 休 祐 派 頼 慶 閑

竹のかきほの栖涼しも

う窓の前夏冬わかぬ詠して

時雨の雲の衣手の山

枕とて折焼しハし頼むよに

忘れかた見ハ夢ならぬやは

別つる泪かたしきうちやねん

憂にたへての哀命いつまで

住人ハあさちにかゝる宿なれや

ハラふ跡たに露のふる道

秋風にさそハれ出し旅の袖

行てもなへしほる雁かね

うら波の月にいくよかとまり舟

あくれハ雲のたなひきにけん

夕霞昨日ハこめし花散て

ねよけにミゆる春の若草

しつかなる露ハこてふや待ぬらん

朝風いつこうつる日のかけ

夏衣ハるゝきぬる道のすゑ

水行橋に立そやすらふ

心たか岩木に残す跡ならん

哀かけすてかへる苔の戸

かり初のむかし語よいとふなよ

かしこきこそは学ひてもしれ

なにとなくわか待暮を虫鳴て

なくさめ草もかれゝの色

秋の霜霧の色に残るらん

山を外面の月ほのか也

ねさめくる鐘より後も明やらて

狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼

おもへハうきも闇にまとへる

うあしからす子をみる心いかならん

すくなれとてや竹ハうへけん

行方ハ庵の小田の嘸ミち

牛ひきかへる暮のさひしさ

乗物も花山にとやいさむらん

尾上のかすミ跡もわすれし

水の色も春のうかふる雪消て

浅沢のへの下崩のころ

芦鶴のかけりてたてる声ゝくに

雲井にさして千世と祈らん

月ミつゝあらはも身ハたあらまほし

秋にもたへよわすれやハする

あたなりし夢の契にかくりきて

おもふあまたのことはのすゑ

三 つてをのミかへても人ハつらき世に

さそふも法のえにハかたしな

下すよの舟に難波の鐘なりて

長柄の橋のはるつくる処

音ハかりかすむ浜へハよる波に

若はの萩ハ風もたまらす

香に匂ふ梅や軒はに咲ぬらん

故郷人のたれにとはるゝ

かたるまをうちと絶きやから衣

立なかむれハ袖の上の露

身にしむる道の空にも名ハ悲し

月にしのふの山の一坂

時雨待夜ミしかき嶺越に

休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休

雲こそなこりかり臥の夢  
 うミし友もいにしへ人と打侘て  
 つらしや老のわれを知のミ  
 陰高き松や子日の種ならん  
 花の春たつこのしかのうら  
 打出る波に氷のひま添て  
 雨より後ハ水まさる音  
 つれくゝのよも暁のミ山居に  
 月や光を残すともし火  
 哀にも秋ののゝ宮荒はてゝ  
 ふりはへいつち露のした道  
 狩くらす小たかのすゝの霧の内  
 しのゝは草の乱れいく村  
 ふけとてやしける薄をかりの庵  
 世を捨人のたのむ山風  
 名つかふるも縁の泪のめくミあれや  
 さかのゝ春ハ行ものどけし  
 袖に櫛芹河水やかすむらん  
 田つらあらずき流す萍  
 雨そゝく空に別るゝ雁鳴て  
 山のは白き雪かすかなり  
 風寒し閨の扉の残るよに  
 夢もつれなし過るうしミつ  
 虎の臥野へしもとハ月待ん  
 露やハ君に身をゝしまゝし  
 武士の心木のはに色見えて  
 矢よりけなるや秋の行比  
 ともしせし夕いつしか鳴こゑに

狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼

片岡つゝきおくふかき里  
 うむら竹や五月雨ふりてけふるらん  
 ねくらもとめてまよふ鳥のね  
 杳にもよ舟入くる湊川  
 浅せもミおとなれる汐時  
 真砂ちのひろふてふかひ跡ありて  
 ちるハ落はを神かきの松  
 かけそふる花の白ゆふ吹風に  
 春ハミかさの朝日さず山  
 金 廿五句  
 寿慶 廿五  
 宗狼 廿五  
 昌休 廿五  
 底本 大阪天満宮本(れ・5-16)  
 校本 内閣文庫本(1)  
 書陵部本 (2)  
 或書曰天文十五丙辛宗牧死去云々又一書天文廿年ト云々  
 十五年ヲ可為正歟追考 天正五年宗牧三十三回追悼  
 年をふるこのもと絶し紅葉哉 紹巴  
 十三年四月六日(1) 宗牧老人(2)  
 天文十九年四月廿四日 宗牧老人(1)  
 追 善 山何(2)  
 軒におふる草の名しける昔哉 宗養  
 かきつはたにそかこはれし宿 昌休  
 打出るあたりの野沢水すミて

休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼 休 金 慶 休 狼 慶 金 狼

ナシ  
 (2・1)





古寺や結し水のあと絶てミえて(1)  
に(1)(2)  
を(1)法には誰か伝へさりけむつか(1)(2)  
 あいれミも身の程くくと契世頼む(1)(2)  
へ(1)(2)  
は(1)わすれは絶ぬ二道の末  
 別しを猶俤ハ送り来て  
 たをらぬ袖も深き梅かゝ  
 あさミとり春行水の遠き野ニ  
 伏見のさハへ霞たな引  
 影は月夜も明かたの雁鳴て  
 たれミにしめる秋風の夢  
 分刷し千種ハ霜を花なれや  
垣(1)  
か(1)(2)陰一本の岩ほなてしこ  
 う山かつの我のミすめるかたハらにとち(1)(2)  
 爪木こるにもたゝをのか時とち(1)(2)  
 終に世ハをくれ先立外にして果(1)(2)  
終(1)(2)いつれの暮か身のつゐとミむいた(1)(2)  
は(1)(2)またしとは恨ミても猶恐侘ぬ  
 そらハ晴しもなお袖の雨  
 入日さす木下露に風立て  
 月出ぬへき山越のミち  
 鳴鹿も伏やふしとの枕かせ  
 きりの色もぬれて寒けきに(1)(2)

養 〉 休 〉 養 〉 休 養 休 養 休 〉 養 〉 休 〉 養 休 養 休 休 〉

あしの屋のたく火ハ浪のまかひにて  
 帰るさ遠き海川(1)(2)つらのくれ  
 忘れめやいそのミるめも花の春  
 かすみをいろに松たてる陰  
 名霜はらふ鶴の毛衣うらゝにて  
 さゝれつゝきの明わたる山  
 夏の夜の月の影ふむ棧磯(1)(2)に  
本(1)(2)空や涼しき門のくれ竹  
 生のほるしつか早苗の朝なく  
 水の色にも秋は見えけり苗(1)(2)  
 星まつる池もけふとや待ぬらんに(1)(2)  
を(1)(2)舟に暮行露の玉蓼を(1)(2)  
お(1)(2)立よるも名にあふ宇治の中舎り  
露(1)(2)山のもミちは木枯のまつさ(1)(2)  
さ(1)(2)影さやに残る日寒し峯高ミ  
 雲も絶くみそれをやミぬさん(1)(2)  
陰(1)(2)むら竹のいつくねところ鳥の声  
 あけほのならし隙白き窓  
 う持なから扇を夜半の手枕に  
 ゆくえをしへよ衣くの月  
 ほの見しハなにか誠の袖の露  
は(1)(2)かたるはかりのいにしへの秋  
は(1)(2)色も香も春にあらそふ花はいさ  
 やよほとゝきす弥生にもなけ

休 〉 養 休 養 休 養 休 養 〉 休 養 休 〉 休 養 休 〉 休 養 休 養 休 養 休 養 休

つれ／＼八日長きころの草の庵

(1・2)

くりかへすにや文ハ残らむ

宗親 五十

昌休 五十

①

養 休

底本 広島大本

天文廿三年六月二日

何人

花に吹く風をもしたふ扇哉

散を見はやの夕かほの露

雨そく垣ね程なく月出て

外面の山そ秋寒くなる

葦こゑほのめかす暮毎に

色もそひゆく野路のはるけさ

一むらの松はみとりに雲はれて

雲にあしたの日ハかくろひぬ

う 鳴鳥や出し舎りを尋ぬらん

山は砌の春ふかきころ

款冬の花にあらそふ藤開て

よせてのとけき池のさゝ浪

風にしも隙見えそむる薄氷

陰は芦屋の乱夜の月

蚊遣火の烟もくるし立出ん

よそのあはれもさそな夕暮

忍ふれと人のとふまで袖ぬれて

またうちつけに何おそふらん

三好修理大夫

長慶朝臣

冬康

等恵

宗親

日堯

為清

宗芸

恕哲

快玉

紹巴

宗周

寿印

直盛

中見

冬康

長慶

宗親

等恵

一葉ちる秋を告こす風の音

夢路おとろく閨の朝露

身にしむる齡の枕又とりて

限もうたゝしらぬ夜長さ

二武蔵野や分来し末の有明に

それかと筆の雲のまに／＼

きのふけふ花咲ぬらし山桜

なかは過行九重の春

鶯の声より年は越初て

つもるかうへに雪ハふりつゝ

面影も枯野の薄又や見ん

むかしかたりの人のをとつれ

ほす隙も月はおもはぬ袖ふれて

汐風いかに衣擣さと

稀にとふ秋もつらしや須磨のうら

明はなれゆくかりふしの夢

跡したふ旅としらすやまてしハし

関の戸かけてつゝく山道

二う 憂にしもまかせや果ん身の向後

よしやいとふも此世のミとハ

思ふかひなくハ酬の有つへし

かはるならひをうらミンもいさ

めくむにもさかし愚さわく物を

道の学ひはあたにやハせん

跡とめてむすふ草葉の遠き野に

えらふにそれとしるき虫の音

宮人や月にうかるゝ夜半ならん

更ては露も玉敷の庭

岩越る浪に涼しき風落て

為清

日堯

恕哲

快玉

紹巴

宗親

寿印

冬康

長慶

直盛

宗芸

等恵

恕哲

宗周

為清

宗親

冬康

長慶

等恵

紹巴

宗周

日堯

快玉

為清

宗親

冬康

長慶

紹巴

暮こそわたれ木かくれの山  
 みしは皆帰る花もる鳥の声  
 折あはれなり此ころの春  
 三 仏さへ世にハわかるゝならひしれ  
 すてすも身をは何惜むらん  
 うさつらさこりぬ心もあちききなや  
 たのむあふせの末もさためす  
 いつまてかふかめ行らん涙川  
 我そうき藻のよるかたそなき  
 とりくくに木綿四手なかず御被して  
 越んもちかくなる鈴鹿山  
 ぶり捨し都の名残いかはかり  
 月ミれは猶旅寝もそうき  
 衣手にこほるゝ露は夕にて  
 妹か植つる小萩さくなり  
 かりそめも移ふ色はあやなきに  
 涙の鏡いかゝむかはん  
 三 頼むとも神もいとハん身ならずや  
 かたかへての舎りとひぬる  
 風吹はおもハぬ浪に船とめて  
 紅葉ちりくる磯山の陰  
 道も只岩ほつたひは絶くゝに  
 けふくゝと見る真柴はかなや  
 かくれすむ草の庵やしくれまし  
 うき身の露は月も恥かし  
 かさぬるも秋の霜夜の苔衣  
 野分にえやハたえん奥山  
 心をもいつくにゆかはしつめまし  
 花より後の蝶のあはれさ

恕哲 宗叢 等恵 長慶 寿印 快玉 冬康 等恵 宗叢 紹巴 冬康 為清 長慶 直盛 恕哲 宗芸 宗叢 等恵 紹巴 宗叢 長慶 直盛 等恵 宗叢 紹巴 冬康 為清 冬康

詠来し園生の霞暮果て  
 とはれすもいつ春雨の空  
 名 せめて名のぬれ衣にたにたゝはたて  
 しらるゝうさもかたミとそなる  
 逢事のあらさらめやと慰て  
 遠方人にかゝる玉のを  
 類なき浦の管屋は物かなし  
 たのむ隣は松風の声  
 いては世を夢にもみしの心にて  
 わすれぬをこそいにしへの空  
 我涙くもらす月もとふ暮に  
 おもひすゝむる雁は鳴なり  
 古郷のつてきくのミに秋もうし  
 いつよりふかき風の萩原  
 散花の野辺は春ともおもほえず  
 くめる名残もかすミゆく袖  
 名 稀人にあへはこゝろも雪とけて  
 とたえし中も契ならずや  
 いひなくによるこそ夢とかこちミン  
 おほかたあたし事ハなかりき  
 長かれと御代をかけてもいのらはや  
 神の伝し大和言の葉  
 武士は直き心をためしにて  
 遠きもなひきしたかへる時  
 長慶朝臣 十二句 紹巴  
 冬康 十一 宗周  
 等恵 十一 寿印  
 宗叢 十二 直盛  
 日堯 四 中見  
 一 五 四 四 九

長慶 宗周 等恵 恕哲 紹巴 為清 日堯 宗叢 冬康 長慶 快玉 直盛 宗叢 紹巴 等恵 長慶 寿印 宗藝 紹巴 等恵 為清 冬康 長慶 恕哲

為清 八  
宗藝 六  
恕哲 八  
快玉 五

底本 大阪天満宮本(れ・5-11)  
校本 内閣文庫本(1)

書陵部本(2)

私印五年八月十一日(1)  
永禄元年七月十八日

阿部(1・2)

たちならせ月に峯行鹿鳴草 も(1)へ(2)  
朝霧わたる岡野辺の道 朝霧(1)  
秋風の誰軒端より時雨るらん 秋の風(1)  
葉分につく里のむら竹  
一筋のなかれの末は橋見えて ゆ(1)へ(2)  
岩ねくに水くる音 岩(2)も(1・2)  
茂りそふ木間の苔の深みとり 葉(2)も(1・2)  
ふる江の柳春もくれけり と(1)イ(1)も(1)  
帰るへき折しる鳥のうち羽吹き と(1)イ(1)も(1)  
雨になりつゝ永日の空 雨(2)  
涙さへ昔かたりのかすくくに 涙(2)  
かこつにちかきゆかりしるしも は(1・2)  
人伝やおもふうらみの残るらん や(1・2)た(1・2)  
あらぬ情はまことともなき な(1・2)  
音借や道の便の前わたり  
蓬生なからみれハ見しやと

蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 蒼 金 蒼 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼

深くなり秋とは露を払かね は(1・2)  
遙なる野を月に行袖 や(1・2)  
哀さは浅沢水に鴨の声 や(1・2)  
草ふきかけそあたりはなれし や(1・2)  
世の外と一木の花の山にきて  
雪や霞のおくに残れる  
春かけて炭やくけふり風をいたミ ぬめり(1)  
市路のかへさ日はくれにけり ぬめり(1)  
おくれたる駒も行くく待つれて た(1・2)  
心くらへはまけんともせし た(1・2)  
難面につれなくもこそしたひつれ  
闇の戸さしもあけたかの月  
あさかほも咲やとまたき起出で た(2)  
尾花の末はうき霧のいろ た(2)  
暮はてぬ鶉の床もまつの風 た(1)枕(1・2)  
たより求むる旅のあはれさ た(2)  
我いかん道の行衛や宇津の山 た(2)  
夏を送れとしけき木隠 た(1)無(1・2)  
守捨る岩間のほとり氷解て 戸(2)  
あしろの浪にあくる日の影  
小車をひくや河原の末遠ミ た(1)  
加茂の祭もはる過てとや  
おとこ山仰く峯よりかすみきて  
月はふもとのわかくさの露  
花を待心は誰もまたけきに も(1・2)  
別てゆくか天津雁かね も(1・2)

金 蒼 巴 蒼 金 蒼 巴 蒼 蒼 巴 金 蒼 巴 蒼 蒼 金 蒼 巴 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼 蒼 金 巴 蒼 金 蒼

舟ひとり明果る夜の梶まくら(仮)  
 管屋のなみを雨にまかえて(ハ)  
 立いてんかたなき里のつれ(ハ)に  
 はらへとちりのつもる細道(ウ)  
 古畑に臥猪のかるもかき捨て  
 すめるかけさへ速き山賤  
 うるほへる柴たくならしうすけふり  
 をきこそあへね霜のむら消(ハ)  
 一本やかれのゝ中のはなす(ハ)き  
下に木ふかき(1)  
ふかき(2)  
 下葉にすたく松虫の聲  
 身をかくす栖もあきの猶寒(ハ)ミ  
(ハ)  
 誰もひらかん雲霧の窓  
 頼む夜を打もねよとの月落て(ハ)  
 しのふににたる偽(ハ)うし  
 花さけハとひ来る人の浅ちふに  
 すミれつむ野は雲雀たつ也  
 紫のかすミの日影かたふきて  
 夕の遠のやまのはの雲(ハ)  
 浦風も雨気ありとや泊船  
 いくしほあひの奥津しら浪  
 あらハれしかたち資し神慮(ハ)  
 祈るにものゝけしきたつ人  
 うらミのミつもれる中の果(ハ)く  
(ハ)  
 こゝろの文のけふりはかなや  
 あらそふもふかきは残る法にして

巴 狼 金 巴 蒼 狼 金 巴 蒼 狼 巴 金 狼 蒼 金 巴 狼 金 蒼 狼 巴 蒼 金 狼 巴

おろかなる身は(ハ)ちかハしぬる(ハ)  
 九重やかき守はうらやまし  
 あかためしにももる(ハ)たひく  
 霞もや行へき花をへたてつ(ハ)  
 春のはてしもあらし武蔵野  
 若はより萩には風のやとりきて  
 折く(ハ)とふを思ふとはせん(ハ)  
見  
 うちそハ、身のうきふしもミへつへし  
 ちきる(ハ)ころのいはけなき人  
方たかへ(ハ)  
 かたらへハむなしき夜半の有明に  
 露より先のそてしほれとや  
 山陰も残るあつさにくれやらて(ハ)  
 またほのかなる日くらしの声  
 むつましき我なてしこも咲つらん(ハ)  
 住てしほともふるさとの庭  
 塩かまの煙は消ていろもなし  
しらぬ時世  
 しらす遠き世も風にうつろふ  
 柚人のうるやいかなる道ならん  
 ひろふ爪木も雪ふかきころ  
 松は只のへふすをのミ姿にて  
 さし入よりも寺のさひしさ(ハ)  
僧  
 鐘の音谷の底なる夕附日  
 夜を待かけや川上の月  
後  
 かけてこし雁の羽風に雲暗て  
 空にそすめる衣うつこゑ  
 仮初のね覚も秋はいさときに  
 物おもふ身や老となるらん

金 蒼 巴 狼 金 巴 狼 蒼 巴 狼 蒼 金 巴 蒼 狼 蒼 金 蒼 巴 金 狼 蒼 金 巴 蒼 金 狼 蒼

ともすれは泪もろぎをくせにして

花にもかこち紅葉にもまつ

あらましや折ふしことのミやこ人

正しき道は誰にもとめん

しるへせよいつくか和歌の浦千鳥

けふりに籠る霜の芦原

ナシ(1)

宗狼 廿五

蒼

紹巴 廿五

金

底本 大阪天満宮本(れ・5-16)

校本 大阪天満宮本(れ・甲-17)

永祿 3・2・25

於越前国宗養<sup>梅野イ</sup>三良右衛門両吟

花に雁あやしやこも帰山

月はしらねのかすむあけ仄

天つ風海吹ゆく衛春見えて

わかうらくを跡のつり舟

ゆふ時雨なミの中より晴る日に

雲まのいつこはつ雪の空

飛鳥の羽音さむミちかくきて

門田ほのかに刈残すいろ

一むらの薄や風をやとすらん

月もこほる、道のへの露

引とむる袖の別れの東雲に

巴 狼 蒼 金 狼 巴

、 、 仍 養 養 、 仍 、 養 、 宗 養 吉 仍

暮頼むへきいなせきかハや  
とはれすは玉のを何にかゝらまし

うき老らくを慰むる友

子規むかしにかへる音を鳴て

うゑしこかけの池の藤なミ

桜花青葉そひ行はるさめニ

かすミや露をむすひとめぬる

朝またき月ハ有明の色消て

衣手うすミかたしきの秋

風の音虫の聲にもいとひわひ

たへかたきまでふるさるゝ里

出でいなは世に残すへき恨かハ

おもかハリするうつしゑの跡

薄墨のゆふへもいさやけさの雪

けふり晴行うらの松はら

しほかまのなミに涼しき月更て

綱手うちはへ船よするミゆ

飼ほとを休む駅路遠かれや

くるゝよるやハ山をすきまし

ならず野のたゝまくおしき唐錦

あき吹風の末のこからし

幽なる蛾の音はなをさひし

なくきりノすちかき草の戸

月ならぬ寢覚の心す果て

ともし火のこるあかつきの雨

鐘の音雲の底なる山寺に

養 養 仍 、 仍 養 、 仍 、 仍 、 仍 養 、 仍 養 、 仍 、 養 、 仍 、 養 、 仍 、 仍 養

とまりからすの梢はるけし  
 いつくともなきたる浪の朝ほらけ  
 風やひゞきの灘と成らむ  
 たよりきく折くさくむねの中  
 此ゆふくれもさハリ社せめ  
 月を待あたりハ端山しけ山に  
 鹿の音つれて出る野の道  
 はらひゆく袖や霧まに寒からし  
 しづくもさほもいとまなき舟  
 くだけつゝ波ハ高瀬の岩こえて  
 花落つくす瀧川の末  
 春もなお風の音羽の嶺の松  
 日ハ霞より雲になるかけ  
 なくひハリ床離れ行野を寒ミ  
 下もえやらぬ草むらの霜  
 一かたにをさゝの緑たちなひき  
 たか枕せし岩か根の道  
 月もまたさよの中山おきわひて  
 さやに見えきも露のまの夢  
 野分たつ風にも人を忘れかね  
 このはにそへて涙もそちる  
 春秋のなかめの中もあたし世ニ  
 かしこき筆をたつ跡もおし  
 のこるさへなお古にたる橋柱  
 ミかさなからのさミたれのころ  
 芦まよりうき巢たよふ鳩の海

養 仍 、 養 、 仍 、 養 仍 養 仍、 養 仍、 養 仍、 仍 仍 養 、 養 仍 養 仍、 仍 仍、 養 仍、 仍 仍、 、 仍

さきのやとりの杉の木たかさ  
 里けふる岡辺のさ山日ハ落て  
 ひたふるしろきみそれとそなる  
 冬枯の野風を残す岡の竹  
 たのむもあハれ賤か一むら  
 暮ぬれば田顔を牛の帰りきて  
 浅さハ水そ草かくれゆく  
 袖になと人めつゝミの洩めらん  
 うきに 堪むや心なるへき  
 思ひます気しき見えたる二通ニ  
 あハする歌の深きことほり  
 笛の音をよるの神楽に聞あかて  
 霜より月や光するらん  
 年の内の花のかたミや菊の露  
 秋やこてふの夢もさめ行  
 まつる野の玉さかにしも分すてゝ  
 ゆふ山もとの神さひてけり  
 三輪川やなかれて幾世すぎの門  
 市の仮屋のかりにたにとへ  
 しけきこそ中く忍人まなれ  
 いつくの文も君はミるらむ  
 唐のおさむる時をためしにて  
 空に日数の限あるあめ  
 春立てけふ生初る七種に  
 一重むめさく水もかうはし  
 青葉ゆふたか袖かきの霞むらん

狼 狼 、 仍 、 狼 仍 狼 仍、 仍 、 仍 仍 仍 、 仍 狼 、 仍 仍 、 仍 狼 仍 仍、 養 仍、 仍 仍

すめるとなりもあらぬ山かけ  
月そ友疎きをたのミ求むなよ

身にいにしへの秋は覚ゆる

すてをきし類かなしきあふきにて

あやなやほたるおもひそふくれ

籠りゐてなかめ侘たる徒然に

管引おほひ雨まゝつふね

明やらぬよるの山風磯のなミ

ねくらさためす零さハになく

松に花ちりかひくもる雪にして

いまはた春のなこりある宿

書陵部本(20—310—C)

永禄三年十一月十日

何路

のこりなくきくや落葉に朝嵐

いく千たひみん霜のまつか枝

かけたかきミねハよなく月待て

それとはかりに遠き鹿の音

旅立てふる里思ふ秋のくれ

やゝハたさむき玉鉾の末

むら雨のはれゆく水の一すちに

いり日かたふく川かせの音

爪木とる麓の小舟さし捨て

おくハはるかにつゝく山ミち

かすかなる鐘ハたか住さとならん

仍、狼、仍、養、仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

仍、狼、仍

霜をまくらにかたしきの月

わりなくも思ふ心をしれかしな

なくさめかねつうちとけぬ程

籠のうちに声する鳥のあハれにて

かせや目にたつ雲かへるらん

山松の根もしるし花のいろ

尾上にのこる雲のあげほの

春の夜の雨のしつくと軒端にて

竹のさむくいこそねられね

かさねてもひとりハさゆるから衣

そなたハいかにあハくはてけん

待はふる比をすくせる時鳥

風に匂ひのうすきたち花

暮そむる雲の向後に雨おちて

しめるけふりやミねの松かせ

人けをもいとふ斗の山里に

ひるなく犬の声ハ冷し

かきやかに文のかよひも稀なれや

おもふをあとのとたひのかなしさ

朝なく梢の花のちり透て

ねとこそしるきそのうくひす

立こめてうす砌の山たかミ

やつれも行かとのへもる袖

宮城野の露分出てみる月に

ゆふかけふかきむしの声く

秋風やいま木からしに成ぬらん

いはほもうこく磯のしら波

かくれかハ世をうミ中に求はや

心前

玖

蒼

水

池

宗狼

伝恵

紹巴

元理

仍景

玄哉

蒼

玖

伝恵

元理

宗狼

池

紹巴

玖

玄哉

仍景

蒼

宗狼

紹巴

元理

玖

蒼



くちてとらふるたなゝし小舟  
 かたふくもたゝ一もとの猶さひし  
 日かけしくれて遠き野の原  
 やとりをもいつち行てかたのまゝし  
 ちきりあまたかくるあたる  
 ふりにたる身をわするゝハ恋路にて  
 むかしハかゝる物もおもハし  
 長きよの月やあらぬと打わひぬ  
 きぬたのうへにふかき露霜  
 かりかねやをのれも風もしほるらん  
 こそともみえぬ春のさむけさ  
 ちる色ハ雪のゆふへの山さくら  
 杉原かすむかねほのかなり  
 関こえていそかしたつる都人  
 あしとき駒もつらき別路  
 はけしさもかけハはなれぬ心にて  
 かせのとたへの夢のうき橋  
 くれ竹のはいりのこやのうたゝねに  
 月ひとりすむ夜半のあはれさ  
 をしてのやいほの海水秋更て  
 霧こそ山をよそにへたつれ  
 暮わたる空にをくれと跡かくす  
 市路のかへさ見えぬ行末  
 遠近のけふり立そふ霜ふりて  
 あさまたきより日やのほるらん  
 浦浪をしのくハをそきたかせ船  
 世にふるわさハなにかやすかる  
 あやしきハたゝ他人の住居にて  
 いはけなきにもあはぬかいまミ

池 紹巴 宗狼 伝恵 仍景 宗狼 元理 玖 蒼 玄哉 紹巴 仍景 紹恵 玄哉 蒼 玖 元理 紹巴 宗狼 玖 池 玄哉 蒼 紹巴 伝恵 元理 宗狼 池 玄哉

憂おもひたれにかならひそめつん  
 うつろひにけり花の一枝  
 亀にさす梅ハかほりもふかゝらて  
 はるまちえてもうつミ火の本  
 かたるにやあつきめくミハしらるらん  
 つたへもてこし家ノの風  
 山よりも山雲はるゝ今朝の月  
 わかれし袖の露いかゝせん  
 忍ふ草染しハ結ふ契りにて  
 たへてこゝろのまつもはかなや  
 秋ちかくなりても影のあつき日に  
 さそなと思ふうつせミのこゑ  
 五月雨のはれ間に滝の落そひて  
 浪こゆるかの布留のたかハし  
 年月のこひわたるをハいひかたミ  
 まけしうらミもおほき我かた  
 ひたすらにすてぬころゝの中にして  
 うきことのはもかきつめてをく  
 かくてこそ折く忍ふかたミなれ  
 とひきてくやし蓬生の秋  
 聞からに人まつ虫の鳴たえて  
 野ハいつのまに冬ちかき空  
 風なから月の川霧しくるらし  
 谷の戸くらきをハつ瀬の山  
 あきらけきしるしミゆるハ仏にて  
 をしへのまゝに法やたもたん  
 たてをくもうふるも庭の花さかり  
 いはかきつゝきかゝる藤なミ  
 なかれそふミかきや春のあまそゝき

元理 紹巴 宗狼 池 玄哉 伝恵 仍景 元理 仍景 紹巴 伝恵 池 元理 蒼 玄哉 宗狼 池 玄哉 宗狼 池 玄哉 宗狼 池 玄哉 宗狼 池 玄哉







袖口の色をも花にねたむらん  
 かけもゆかしき春の小車  
 その人とおもひのとめてみまくほし  
 あけはつるまを夢よまた南  
 かへらんもしらぬ社たゝ都なれ  
 なミの立居もうき旅の空  
 友なしに今も音をなくはま千鳥  
 新嵐もりのさそな朝夕  
 とは山やその春秋をおもひやり  
 ものゝ哀はふかくさの里  
 をく露もあらしにもろき跡見えて  
 落葉の上の月寒き色  
 侘しらに猿さけひよる椎のもと  
 岩間の水の末かすかなり  
 打わたす橋の一すち朽のこり  
 をくは寺ある山のけハしき  
 入相のかねハ八重立雲の中  
 雨さミたれて時わかぬころ  
 さひしさをたへてならハす草の戸ニ  
 とはてつらきもさのミ恨ミし  
 身のほとにあさき心やしらるらむ  
 さとりえて社法のことハリ  
 木々の上も世のさかなさをあらハして  
 道はよもきか陰にふりつゝ  
 筆をふる里ハ残るも何ならず  
 遠かた人を恋わひて待  
 めくりあハんとはかり契関越て  
 隔てもて行しら雲の山  
 花さけは月遅く成宵くくに

行充 治康 長慶 宗狼 治清 長慶 宗狼 淳世 道薫 行充 秀継 長慶 宗狼 盛直 道薫 淳世 行充 宗狼 盛直 長慶 行充 宗狼 盛直 淳世

みきりの松の緑とふかけ  
 春のくる朝戸あくれハ霜解て  
 またき声する野へのうくひす  
 起いつる竹の下道うつる日に  
 やゝしほれ行あさかほの色  
 舟とむる秋の明石の磯の浪  
 ミるくくとをくのほるうす霧  
 村さめにしハしかくろふ空の月  
 こゝろつくして待ふかしけり  
 闇ちかき風の音信まかふ夜に  
 いつはりにさへなくさミそする  
 取出し打置かたき文なれや  
 そのかみさこそ残りぬる庵  
 行とくとけふの祭にあふひ草  
 いろもことなる袂舞くく  
 うすくこき薫をもらす焼物ニ  
 かけよしありてすミなせる宿  
 池水にあかぬこゝろやうかふらん  
 ひとりハねしと駕の鳴声  
 暮初る風のけしきハ猶さむミ  
 ちりくる花は雪の明ほの  
 なかめやる末は霞の山かけて  
 ミやこのうちはひとしほの春  
 長慶朝臣 十九 盛直 八  
 治清 三 秀継 八  
 宗狼 十九 治康 七  
 道薫 十一 長阿 一  
 行充 十二  
 淳世 十二

淳世 行充 長慶 盛直 宗狼 長慶 淳世 行充 宗狼 道薫 秀継 長慶 宗狼 盛直 道薫 秀継 治康